



国立劇場の思い出

大阪取引所
代表取締役社長

横山 隆介

初代国立劇場が10月末をもって57年余の歴史に一旦幕を閉じた。1966年開場の同劇場は私とほぼ同い年になるが、その思い出の一端を語りたい。

国立劇場は大劇場、小劇場、演芸場の総称だが、最初の出会いは演芸場だった。大学で落研だった私は、当時、チケットが入手困難だった人間国宝の柳家小三治目当てで、優先予約ができる賛助会員になったのが始まりだった。

演芸場では小三治は勿論、大好きだった三遊亭円丈の高座にも多く触れた。新作派の円丈も、晩年は師匠であり、昭和の名人と言われた円生の持ちネタを演ずることが多く、これが実に素晴らしい出来だったのをよく覚えている。

ちなみに、噺家が最初に喋る小話をマクラと言うが、演芸場ならではの定番マクラがあった。「今日は演芸場の裏で歌舞伎があるらしいですね。尤も、向こうに言わせればこっちの方が裏ですが(笑)」。

そんな風に落語を楽しむ中、「表」大劇場の歌舞伎公演に目が留まった。歌舞伎座と比べて入場料が安く、何より、通し狂言を基本とする上演方針が、初心者だった自分が歌舞伎を理解する上でとても役立った。また、十二代目團十郎、二代目吉右衛門といった名優に出会えたのも国立のお蔭だ。

さて、小劇場と言えば文楽である。落語の「寢床」に出てくる「義太夫」程度の予備知識しか無かった自分にとって、小劇場で初めて見た文楽は

文字通り衝撃(ショウゲキ)だった。義太夫、三味線、人形が一体となる文楽の醍醐味を多少なりとも理解できるようにするまで随分時間はかかったが、その分今は文楽に一番嵌っている。

残念ながら思い出深い劇場は閉場となってしまった。再開は2029年と言われているが、昨今の建築資材高騰を背景に着工遅れとの気がかりなニュースも聞こえてくる。閉場中は別の劇場を間借りして公演を続けるとのことだが、特殊な設備を必要とする文楽公演の継続も心配だ。

しかし、心配ばかりしても仕方がない。今の国立劇場に設備面で老朽化を感じたのも事実。演目によっては半日以上を劇場で過ごす訳で、食事や買い物などの面でワクワクする要素は必要だし、周囲に商業施設が乏しい単町という土地柄、建て替えを機に複合施設にして新たなファンを呼び込もうというアイデアは理解できる。

幸い、この春から大阪に赴任している。大阪は文楽発祥の地である。今は大阪日本橋の国立文楽劇場にせせと通いつつ、二代目国立劇場の開場を楽しみに待ちたい。

